

〔エッセイ〕

〈特別寄稿〉

哲学秘話 何故の女性哲学者なのか

山 下 太 郎

A. 処女哲学者ヒュパティアの死

これまで私は、次の二人の女性哲学者の生きざまを記して来た。「哲学秘話」と題し、

(1) デカルトと王女クリスティナ

(2) ライプニッツとゾフィエ・シャールロッテ

そのいずれもルネッサンス期の後に現れた高名な哲学者と、女性との組み合わせである。むろん女性哲学者のほうが主役であり、最初に発表したのは、昨春発行の同人雑誌『大地』29号と、本年夏発行の同じく30号であった。『大地』というのは私の長く勤めた国立静岡大学の文理・人文学部OBの作った雑誌で、元教授の論説も載せた文化誌である。

「何故の女性哲学者なのか」についての私の考えは、女性の鋭い直感が事態の真相を見抜いて、その対策のために力を尽すのではないか、ということであった。それだけに、最初の旧原稿を御覧になった日本ヤスパーズ協会の林田新二理事長先生が、協会の昨年12月10日の総会で、懇切な御披露を賜ったと伺って感激した。私はこの問題の締めくくりとして、「カントとヤスパーズ」を取り上げる予定でいたのだが、途中で私の考えも変えた。まだなお、女性哲学者の代表として強調しなくてはならぬ事例が、あることに気付いたからである。

その第一は、最初から私の念頭にあったもので、序言として付け加える用意もしていた「処女哲学者ヒュパティアの死の真相」である。そして第二は、日本ヤスパーズ協会のために、この連作を書くつもりであった根本目的の、「レギーネ・オルセンのキルケゴールに尽した働き」である。

「デカルトと王女（実は女王）クリスティナ」を話題にした当初から、顧問

として協会のお役に立つためには、このテーマを逸してはならぬと心に決めていた。ただこの二件は三部作の最後の「カントとヤスパース」の中で触れることにしていたのを、今回思い直して直接の表題（柱）にして、「カントとヤスパース」は再訂正した。

そこで早速ヒュパティアの悲劇から始めるが、時は西暦第五世紀前半から、第六世紀の初めにかけてであった。一時新プラトン主義⁽¹⁾の哲学者たちと、漸く公認され始めたキリスト教徒との対立が激化して、新プラトン主義者の側からの『キリスト教駁論』が相次いだ頃、突然アレクサンドリア学派⁽²⁾に属するヒュパティア（Hypathia）の死が伝えられたのである。

彼女は女性哲学者としての直感から、この際無用の対立を続けることの非を悟り、両者の間に立ってその和解を奨めようと健気にも決意を固めて、その実行に移った。ところがその志を誤解した狂信的なキリスト教徒の一賤民の振った刃のために、あたら善意の美女の意図は空無に帰し、彼女の虐殺された血を潔めるすべもなかった、という次第である。両陣営とも激昂し始め、あわや内乱の危機も懸念されるに至った。

ローマ帝国は東西に分裂して、西ローマ帝国は既に五世紀に滅亡し、皇帝職は空位のため、この混乱の収束は不可能と見えた時、名君と言われた東ローマ帝国の皇帝が、この難局を打開するために立ち上がったのである。その皇帝ユスティニアヌス一世（独 Justinianus I, Flavinus Anicius, c. 483～565）は、自ら西ローマ帝国の帝位をも引き受け、相対立する両者を制して、一方ではキリスト教徒の暴走をきびしく抑えるとともに、新プラトン学派の本拠であるアテナイの「アカデメイア」に対しては、勅命をもってその閉鎖を厳命した。

こうしてヒュパティアの願いは達成されたけれども、学祖プラトン以来一千年も続いた「アカデメイア」の学鐙は消え、残った学者たちは東方のペルシア（後のイラン）に逃れるしかなかったのである。西暦紀元529年の事だった。

B. キルケゴールとレギーネ・オルセン

ヤスパース協会は、実存哲学の流れを継いでいる。その意味では、是非ともこの最も代表的な女性哲学者の紹介を省くわけにはゆくまい。その女性とは外

ならぬレギーネ・オルセンである。哲学者キルケゴールの求愛を受けて、一旦は喜んでその申し出を承諾したはずなのに、キルケゴールの方から婚約解消を告げられて、泣く泣くその要請に従った、という通説がまかり通っている——何ということだろう。トンデモナイ噂だ。私はこの兩人に代って、事の真相を語ることを、自身の責務と思っている。事実は全くその正反対なのだ。

哲学者のセーレン・オーピュエ・キルケゴール (T Søren Aabye Kierkegaard, 1813～1855) はデンマークのコペンハーゲン (独 Kopenhagen, ケーペンハウン T København 商人の港の意) の富裕な商人の子に生まれ、コペンハーゲン大学で哲学と神学を修めた。特異な内容の卒業論文『イロニー (Ironie) の概念』のため問題視され、卒業はできたが、以後も独特の言動のためキリスト教の牧師になることを許されず、一介の町の哲学者で終わった。

他方レギーネ・オルセン (T Regine Orsen) は、上流家庭で大切に育てられ、素直で愛らしい乙女に成長していただけに、彼女の両親は「婚約破棄」と聞かされて怒り、娘に即刻キルケゴールと離別するように迫った。この時の彼女の態度が重要である。キルケゴールを恨むでもなく、泣き騒ぐのでもなく、全く素直に両親の言葉に従ったのである。人はこれを育ちの良さと感じ取り、それが当然の態度と思うであろう。

ところがレギーネの本心は決まっていたのである。「これには何か理由があるに相違ない」と考え、しばらく様子を見ようとしたのである。

それではレギーネはキルケゴールに問いかけて、その返事を期待していたのかというと、これも違うのである。彼女は離れた位置から、相手が何をするかを見つめていたのだった。すると先ず気になるのは、キルケゴールが孤独で考え込んでいることだ。キルケゴールは「生来憂愁の哲人だった」との定評がある。しかしレギーネはそんなことを問題にしたのでもあるまい。孤独なのは兄や姉たちが揃いも揃って早死にしたと聞いた時、彼女はそのことが憂愁の原因ではないか、と思い始めたのである。

今は誰でも知っていることだから簡単にまとめるが、問題はキルケゴールの父にあった。その父親は出自が貧しく、少年の頃ユトランド (ユルラン T Jylland) 半島の西北岸リングケーピング (T Ringkøbing) に近い荒野で羊飼いの番人を

務めていたが、飢えと寒さのために神を呪ったことがあった。それを長じても永く悔やんでいるうちに、羊毛の商いで巨富を積んだものの、妻を迎えて生んだ子たちが、次々に早世してゆくを見て、遂にこれが荒野で神を呪ったのに対する神罰と思い込むようになる。苦悩のあまり、次に生まれたセーレン・キルケゴールにも洩らしたから、セーレンはこれを「地震」のように感じたと言っている。

そこで哲学者のセーレンは、健康上の理由から自分自身も兄弟たちと同じく三十四歳までは生きられまいと思い込み、婚約者のレギーネに悲しい想いをさせてはならぬと決意して、破約の挙に出たわけである。しかし、教養高き彼としては神罰を信ずる気にもなれないので、流石は知恵も文才も抜群のセーレンのことであつた。自分の実名をそこでは使わずに、仮名(カメイ 独 Pseudonym)をふんだんに駆使して、レギーネに諦めさせようと試み始めた。登場人物には、浮気者のドン・ファンや、堅ぶつの道徳家などの例を挙げて、本当は自分自身が至らぬ男だと思い込ませようとする。こうして遂に美的・倫理的・宗教的な「実存」(独 Existenz, T existens エグジスダン)の三段階が有名となるに至った(『人生行路の諸段階』や『哲学的断片への結びとしての非学問的後書き』参照)。もっとも同時発表の聖書解説書『建徳的講話』では実名を用いているから、何もかも仮名にしたというわけでもない。

実はセーレンは三十四歳より八年も長生きしているので、その間に『わが著作活動の視点』と題する一文を草し、これを唯一人生存していた長兄ペーター・キルケゴール(T Peter K.)に托した。ここでは彼は三段階説を改めて、美的と倫理的とを一括して美的となし、共に大衆をだますための詐術(独 Teuschung)と称し、我々はこれを排泄すべきだと公言している。「排泄」(独 Ergiessen)とは「克服」であり、「超越」であつて、宗教的実存の、それも内在的でなく超越的のみが真実であると解すべきであろう。

私がレギーネ・オルセンの行動になぜ注目したかと問われるならば、その答えは「キルケゴール一家の墓場の構えにある」と言いたい。墓場は前をコンクリートの壁で蔽われており、入口にメラの墓がある。メラ(T Møller)はキルケゴールの大学生時代の恩師で、後に親友となったが、早く死んだ人だ。

その門を入ると、中央にキルケゴールの父と兄と当のセーレンの三人の墓石が合葬されて立っている。そして更に北側の奥まった処に、レギーネとその夫のスレーゲル教授の夫婦塚が、キルケゴール一家をかばうが如き配置で納まっている。

スレーゲル教授 (T Prof. Schlegel) は生前のセーレンとも親しく、その死後レギーネの両親の勧めで彼女を妻に迎えたのである。夫としてもふさわしく、学者としても優れた人物であった。レギーネもこの結婚には異論もなく、添いとげて夫婦とも幸せな長命に恵まれている。こんなスバラシイ墓場を誰が考えたのかと聞くと、それは長兄のペーダーの妻の出たルンの家の人だと言われた。現在は全体がコペンハーゲン市の管理になった由である。

それにしても、セーレンの書を全部読んで、その教えを守ったレギーネを、私は「聖女」と呼びたい気がしていた。しかしその言葉を口にしかけた時、墓場に居合わせた老女の声が聞こえてサスガとうなづいた。「あの方はそんな自分の力を誇るような人ではありません。尽すだけ尽した後は退いて、それを身の幸せと思うようなつましいお方なんですよ」と。

まこと、こんな見事な、しかもいじらしい人生を送った女性のことは、涙なしには語れない。

C. ヤスパーズ夫妻の戦時中の危難とその影響

はやエピローグを書く順番となった。わたしは「カントとヤスパーズ」と題して、ヤスパーズ協会の前身も含めて、その創立者の鈴木三郎さんの言葉と、鈴木さんと後輩の私にも共通の恩師であった旧制東大の哲学科主任教授、伊藤吉之助先生の主張を紹介するつもりだったが、今はその考えを改めた。

これから後の文章は、私の敬愛する協会理事の一人平野明彦君の報告に基づいて記すことにする。そのため平野君は、ヤスパーズの愛弟子のザーナー氏の記録 (理想社刊) をも、見られるようにしてくださった。そこで、これからの主題は「戦時中におけるヤスパーズとその妻ゲルトルート夫人の運命」である。

時代は第二次世界大戦のさなかであり、ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) を総統 (Führer) と仰ぐナチス (NAZIS, Nationale Sozialisten) によるユダヤ人虐

殺の危険も迫っていた。ヤスパースはユダヤ人である愛妻を、身を以って護る覚悟でいたが、当初は自身の勤務する大学や、関係する行政官庁が、必ず防いでくれると信じて、繰り返しその要請を続けていた。

ところがヒトラーは先ずヤスパースに対し、その妻を離婚せよと強要し、ヤスパースがこれを断乎として拒絶したと知るや、遂にその牙をむき出すに至った。元来は第一次大戦における敗戦国ドイツに対する勝利者側の過酷極まる賠償要求と、それに伴う戦後の世界的な経済恐慌 (Panic) がヒトラーの決起を促したのであり、当初は選挙で勝利を占めたこともある。しかし一旦政権を掌握するや、反共産主義政策を名目にしてユダヤ人殺害を始めたのは許し難い暴虐であった。ヤスパース夫妻はそんな主義者では全くないのにである。

ヒトラーはあらゆる手段を用いてヤスパースを抑圧し、ついにその勤務するハイデルベルク大学より追放し、その著作活動も禁止した。また夫妻の国外への脱出希望を含むさまざまな要求をも、関係官庁を通じて悉く拒否したのである。これについてのザーナー氏の記録は詳細を極めているが、それによると親しい友人たちとの交際も封じられて、夫妻の頼るべき道は総て奪われてしまった。

残る手段は秘密警察の近づく前に、二人してその身の決着を図ることではない。ヤスパースは知人を介して青酸カリを手に入れ、日中は戸棚の中に置き、夜間は枕辺の机の上にのせて、万一の場合に備えた。遺言書も用意し、こまごまと二人の最期の措置を願っている。何日も何日も、いや何ヶ月も二人は心の地獄の中に居た――。

第二次大戦は1945年に至って漸く終わりを告げた。ヒトラーはソ連軍の攻撃で謎の死を遂げ、他方ヤスパースはハイデルベルク大学の学長として迎えられた。それで大学の正面玄関の上に、有名な「汝自身を知れ (希 Gnothi Seauton)」の扁額を再建掲揚もした。しかし悲惨な思い出しかない故国に留まる気にもなれず、遂に辞任してスイスのバーゼル大学教授に移ることになる。この動機には、ハイデッガーが最初師事した当時の新カント学派主任教授リッケルト⁽³⁾ (Heinrich Rickert) の批判もあったため、とされている。

夫妻の解放の事情を知って、各地の高名な学者の方々の来援協力も続き、か

くして今日の国際的ヤスパース協会の盛況も見るに至った。約束した紙数も尽き、十分な記述を果すには至らなかったけれども、平野明彦理事の慎重な御配慮に対して厚き謝意を述べて、この私のエッセイを結ぶこととする。

注

- (1) 慣例に従い「新」を附したが、当時は「新」は付かなかったという河波昌氏の御指摘には教えられた（本誌13号48頁以下）。
- (2) 新プラトン学派はアレクサンドリア・ローマ学派、シュリア学派、アテナイ学派に分かれているが、一番穏健なアテナイ学派が狙われたのは気の毒である。
- (3) リッケルトの批判は、ヤスパースが正規の哲学の学習を経ていなかったためだが、リッケルトは後にその考えを撤回した。

（略記号 その他）

希はギリシア、独はドイツ（又は独訳）、Tはデンマークの各語音。

因みに、ギリシア文字、ゴシック文字はローマンに変えてある。またデンマーク文字は、bがp、tはd、vはu、øはö音である。

なお語尾は発音せず、従って Kierkegaard の読みはデンマークでは「ケヤケゴヤ」である。

（静岡大学名誉教授）